「アウシュビッツを一人で生き抜いた少年」を読んで

新聞書評の「信念とけなげさに幸運は目を止めた」を目にし、「幸せな子～アウシュビッツを一人で生き抜いた少年～」を購読した。

１０才の時に父母と引き裂かれ、しかも日常的に労働に適さない子どもが生死を選別される状況の中で、アウシュビッツでゴミ集め、使い走り等の労働をさせられながらもたった一人で生き抜き、今は国際人権家として国際司法裁判所判事の自叙伝であった。

著者は、「大変な時代を生きた人々が自分の体験談を本にすることは歴史上の出来事に人間の顔を与えることができ、そうすれば、虐殺や人類に対する犯罪が世界のどこかで新たに起こりうるという危険性に常に注意を向けるよう、将来の人々にも促すことが出来るからだ。（日本語版によせて）」と述べている。
それだけに、著者自身が「ほとんど感情的になることなく書けるのだろうかと、時々不思議に思う」と述べているほど、１０才の少年の目線で綴った本書は、ホロコースト（ナチス政権下のユダヤ人などに対して組織的・意図的に行われた大量殺戮）がよりリアルに伝わってきた。

著者は「生きのびたのは、一言でいえば幸運だったからだ。」という通り、正に奇跡的な「運」の数々…。
例えば、収容所の毎朝の点呼では列の最後に並び、点呼が終わって死の選択が行われそうな気配を感じたら、バラックにこっそり入って隠れて見つからなかった「運」、労働に役立たない子どもの選別（＝死）の時、前に出て「僕は働けます」と訴えて選別から外された「運」、ガス室送りの選別があった時、親しくなった医師がリストから名前を外しておいてくれた「運」、等々。

単に「運」だけではなく、悲惨な極限状態にあっても「生」を諦めていない少年のけなげな姿に、周りの大人達も「生への希望」を感じたからこそ、いくつかの「運」を少年に与えたのでないだろうかと、ふと思った。

著者は体験から、歴史的出来事の原因、背景を一般化して結論づけようとしても、「多くの人々はいとも簡単に罪を犯せるのに、ある人々は、それらに抗する、あるいは、少なくとも恐ろしい罪を起こさない強さや倫理的勇気を持ちうるのかという疑問にこたえることができないのだ。」と述べている。

さて、我々はこの疑問に答えうる自らの心の準備はできているのだろうか、そのことを気づかされる書でもあった。

阿部幸泰　　（2009 年 3 月 26 日　記）